

Gardencourt と Isabel Archer

—H. James 研究—

出 原 博 明

H. ジェイムズの小説の研究において住居の象徴性はよく指摘されるところであるが、この小論の目的は、ガーデンコートのカントリー・ハウスとイザベル・アーチャーとの関係に焦点をしばってその意味を解明することである。

The Portrait of a Lady の中には、Mme Merle や Mrs. Touchett のものを合わせると七つほどの住居が具体的に詳しく描かれているが、イザベルが直接に深くかかわるのは、Albany の祖母の家、Gardencourt のタチェット家のカントリー・ハウス、Florence と Rome の Osmond の住居、の四ヶ所である。

イザベルが22歳の若さでこの物語に登場したとき、彼女は、親のない娘になっていた。父親を喪ったのは一年ほど前だが、母親がこの世を去ったのは十年余も昔、彼女がまだ子供の頃のことだった。

父親は世間の輦轡を買うほどにも随分と彼女を甘やかしたという。こうして母親不在の家庭で男性の片親に育てられたということが、彼女の人格形成に少なからぬ影響を及ぼしたようだ。

彼女には二人の姉がいるが、母親が亡くなったとき彼女たちはイザベルほど子供ではなかったし、イザベルの場合のように父親に特に気にいられて身の為にならぬ溺愛を受けることもなかった。無器量な一番上の姉は弁護士を夫にもち、美人の二番目の姉は職業軍人と結婚していて、それぞれ、一般世間というものに適合していた。

イザベルは、上記の姉たちと違って、オリジナリティに富んだ、一風変わっ

た娘に育っていた。

舞台に登場したとき、彼女は、住むべき特定の住居の無い、「家なき娘」の状況に置かれていた。のみならず、それ以降も、Chandler が指摘しているように、¹ 故国を離れたアメリカ女性としてイザベルが住んだどの住居も、真の意味で「彼女の家」ではなかった。

チャンドラーは、この作品を「ホームレスであることの悲劇」と見做している。²

Armstrong は、オズモンドと知り合ったイザベルは自分を何かに縛りたくなつたのだ、という解釈をしているが、³ そうだとすれば、そこに、「家」への彼女の潜在的願望をみることもできよう。

この物語には、家なき娘イザベルが自分に適った居場所を求めて漂泊する過程を描いている、とも、或る意味では、いえる側面がある。

さて、イザベルが叔母タレット夫人に連れられて新しい人生へと旅立ち、途中のホテルは別として、最初にその身を置いたのが、他ならぬガーデンコートのカントリー・ハウスである。幕が切っておとされて物語が始まったのも、ガーデンコートの一場面からである。

ガーデンコートの中庭で一人の老紳士と二人の青年がティータイムを楽しんでいるという舞台設定をしてそこへイザベルが姿を現わす、というところから、ジェイムズの長編中でも最も長い、217,300語から成る⁴ この物語は始まっているのだ。

ロンドンから40マイルほどの郊外にあるガーデンコートの中庭。夏の午後。日が地平のほうへ傾くにつれて、芝生の上に長く伸びていく、屋敷や樹木の影。遠景の中のテムズ川。(ラルフは、イザベルを建物になぞらえるが、彼女の内面と庭の呼応を強調する研究者もいる)⁵

ティーカップ片手に、椅子にゆったりと身を沈めている老紳士と、その近くに立って会話を楽しんでいる二人の青年。テリアとコリーの二匹の犬。芝生と樹木と、風雪の刻まれた、蔦の這った煉瓦壁、束になった煙突、蔦の絡

んだ窓、これらのものの色の調和。

It [the old English country-house] stood upon a low hill, above the river—the river being the Thames at some forty miles from London.

A long gabled front of red brick, with the complexion of which time and the weather had played all sorts of pictorial tricks, only, however, to improve and refine it, presented to the lawn its patches of ivy, its clustered chimneys, its windows smothered in creepers (2, [3]).⁶

この情景の一点を破って、一人の若い美しい女性が姿を現わす。

この女性こそ、わたしたちのヒロインのイザベル、なのだ。真っ先に彼女に気付いたのはテリア犬であり、次いで、ラルフ・タッチェット [Ralph Touchett] であった。

イザベルは、ガーデンコート滞在中に、彼女のその後の人生を決定するのに重要な役割を果たす彼女の性格とマナー感覚の殆ど全てをあらわにしてしまう。

この最初の場面で、イザベルは、はやくも、ラルフに、「この娘は、この家の主人 [Mr. Touchett] の方から挨拶に来るのを待つつもりなのだろうか」と、心の中で呟かせるような未熟なマナーを見せてしまう。

彼女は、戸口から姿を現わしたあと、ラルフにうながされるまでは、タッチェット氏のところへ挨拶に行こうとする気配も示さなかったのである。彼女は、人並みはずれてオリジナリティと自立心の強い女性ということになってはいるのだが、この行動は、マナー感覚の欠如といっても厳しすぎることにはならないだろう。

彼女が早くに母親を喪って父親の手で育てられ、しかもその父親が他の人たちからも非難されるような育て方をしたということもあって、マナーを知らない娘に育てているということは指摘されるどころであり、⁷これもそれを裏づける事例の一つに数えていいだろう。

彼女が到着した日の夜、ラルフは、彼女の所望に応じてギャラリーに案内するが、この女性に「強情で、人の言うことをきかない」ところがあるのに気づく。疲れているから明日にしてはどうか、といくら彼が繰り返しても、相手は、どうしても今見せて欲しい、と喋りきかなかったのだ。

ウォーバトン卿 [Sir Warborton]、ラルフ、タチェット夫人、イザベル、の四人で夜更けの会話を楽しんでいて九時を過ぎそうになり、タチェット夫人が自分の部屋へ引き揚げようと言うのに、イザベルのほうはそのままそこに男たちと一緒に残りたいと主張して、夫人に叱られるくだりがある。理由は、ここは、アメリカではなくてイギリスなのだから、ちゃんとした若い女性が、お付きの者なしで、夜遅く男性と同じ部屋に同席すべきではない、ということだが、これに対するイザベルの反応は、性格とともに、イギリスとアメリカの文化の違いに拠るところも大であろう。

イザベルは、ラルフに、ガーデンコートの前では幽霊を見ることができるとか [“Please tell me — isn’t there a ghost?” (62, [3])], と訊く。ここには、彼女の性格の中のロマンチズムが顕著だ。

ラルフは、イザベルがロマンスをもって来た、と考える。

“It’s not a romantic old house,” said Ralph. “You[Isabel]’ll be disappointed if you count on that. It’s a dismally prosaic one; there’s no romance here but what you may have brought with you.”

“I’ve brought a great deal; but it seems to me I’ve brought it to the right place” (62, [3]).

ラルフは、幽霊を見ることが出来る人の条件を述べる。

Ralph shook his head sadly. “I might show it [the ghost] to you, but you’d never see it. The privilege isn’t given to every one; it’s not enviable. It has never been seen by a young, happy, innocent

person like you. You must have suffered first, have suffered greatly, have gained some miserable knowledge. In that way your eyes are opened to it. I saw it long ago," said Ralph (64, [3]).

そして、ガーデンコートは物語の開幕の舞台であったばかりでなく、のちに、辛い人生経験を経たイザベルが遂に幽霊を見ることになる場所でもある。

イザベルがウオーバトン卿から求婚されたのも、物語の最終場面でキャスパー・グッドウッド [Casper Goodwood] から強引なキスの急襲を受け、改めて求婚されたのも、ガーデンコートである。

死に臨むラルフとイザベルの対面の場면을、物語のクライマックスと見做す解釈も成り立つだろう。そうすると、この物語の開幕もクライマックスも終幕も、それらの舞台は、いずれも、ガーデンコートだったのである。

これらのことから、ガーデンコートは、物語全体の流れの中で大変重要な役割を果たしているといえよう。

では、問題のガーデンコートのカントリー・ハウスとは、どういう建物であろうか。

先ず、最初の中庭の場面で、初対面のイザベルにラルフが、この建物について、「初期チューダー朝様式」と説明している。物語の時代は1870年代と考えられるから、そこから逆算すると、これは随分と古い建物だということが判る。つづいて、それが銀行家タッチェット氏の所有物になるまでの経緯が、語り手によって簡単に語られている。それによると、この建物は、エリザベス女王もお泊まりになったこともあるという由緒正しいものだが、のちに、クロームウエルのカトリック粛清の攻撃によって損壊をこうむり、修復され、更に、18世紀にも、若干の手直しが加えられた。

The house had a name and a history; the old gentleman [Mr. Touchett] taking his tea would have been delighted to tell you these things: how it had been built under Edward the Sixth, had offered a

night's hospitality to the great Elizabeth (whose august person had extended itself upon a huge, magnificent and terribly angular bed which still formed the principal honour of the sleeping apartments), repaired and much enlarged; ... (2-3, [3]).

アメリカ出身の銀行家は、建物そのものが気に入ったからではなくて、割安に売り出されていたので買ったのだという。しかし、ここで暮らしているうちに、その良さが判るようになり、今ではそれを愛するようになっている。

...and how, finally, after having been remodelled and disfigured in the eighteenth century, it had passed into the careful keeping of a shrewd American banker, who had bought it originally because (owing to circumstances too complicated to set forth) it was offered at a great bargain: bought it with much grumbling at its ugliness, its antiquity, its incommodity, and who now, at the end of twenty years, had become conscious of a real aesthetic passion for it, so that he knew all its points and would tell you just where to stand to see them in combination and just the hour when the shadows of its various protuberances — which fell so softly upon the warm, weary brickwork — were of the right measure (3, [3]).

夏の午後の中庭の場面でも、この建物に注がれるタッチェット氏のまなざしは愛情に満ちており、彼は、イザベルに向かっても、「イギリスには、ほかに、これほど素晴らしい建物はない」といって自慢している。

“How old is your house? Is it Elizabethan?”

“It's early Tudor,” said Ralph Touchett.

She turned toward him, watching his face. "Early Tudor? How very delightful! And I suppose there are a great many others."

"There are many much better ones."

"Don't say that, my son!" the old man protested. "There's nothing better than this" (21, [3]).

ラルフも手放しで賛成するわけではなく、ウオーバトン卿は彼の邸宅のほうがもっと良いとって反論するのだが、イザベル自身は、「これほど美しい建物は見たことがない」といって、手放しで感嘆している。

She [Isabel] had been looking all round her again — at the lawn, the great tree, the reedy, silvery Thames, the beautiful old house; and while engaged in this survey she had made room in it for her companions; a comprehensiveness of observation easily conceivable on the part of a young woman who was evidently both intelligent and excited. She had seated herself and had put away the little dog; her white hands, in her lap, were folded upon her black dress; her head was erect, her eye lighted, her flexible figure turned itself easily this way and that, in sympathy with the alertness with which she evidently caught impressions. Her impressions were numerous, and they were all reflected in a clear, still smile. "I've never seen anything so beautiful as this" (20-21, [3]).

内部に関しては、くろ光りのする板の床や鏡板壁の描写がある。そこは、ほの暗い雰囲気だが、外界からの明かりがさし込んでくるのは朝顔口の観音開きの窓からだ。

数人の召使いたちも住んでおり、そのうえ、使用されていない部屋もたくさんあるようで、とても大きな建物だということを彷彿させる。

屋敷全体が、しんかんと静まりかえっている。

Her [Isabel's] uncle's house seemed a picture made real; no refinement of the agreeable was lost upon Isabel; the rich perfection of Gardencourt at once revealed a world and gratified a need. The large, low rooms, with brown ceilings and dusky corners, the deep embrasures and curious casements, the quiet light on dark, polished panels, the deep greenness outside, that seemed always peeping in, the sense of well-ordered privacy in the centre of a "property" — a place where sounds were felicitously accidental, where the tread was muffled by the earth itself and in the thick mild air all friction dropped out of contact and all shrillness out of talk — these things were much to the taste of our young lady, whose taste played a considerable part in her emotions (73, [3]).

美しいだけでなく、この屋敷には、心を鎮めてくれる「かそけさ」があるようだ。

どこにどういう手を加えたかということには、一切触れていない。根本的には、最初に建てられたときの初期チューダー朝様式が支配的だろうということは、当然、考えられる。そして、中庭は将にイギリスのそれだ。まるで、それ自体、ひとつの独立した部屋であるかのように、描かれている。樹木が大きな樅とブナというのも、いかにもイギリスらしい。

The front of the house overlooking that portion of the lawn with which we are concerned was not the entrance-front; this was in quite another quarter. Privacy here reigned supreme, and the wide carpet of turf that covered the level hill-top seemed but the extension of a luxurious interior. The great still oaks and beeches flung down a

shade as dense as that of velvet curtains; and the place was furnished, like a room, with cushioned seats, with rich-coloured rugs, with the books and papers that lay upon the grass. The river was at some distance; where the ground began to slope the lawn, properly speaking, ceased. But it was none the less a charming walk down to the water (3-4, [3]).

ところで、その初期チューダー朝様式とは、どういうものでしょうか。

第一にあげられるべき特徴は、それがゴシック建築と深くかかわっており、ある意味では、イギリスのゴシック後期とも見做される、⁸ ということであろう。

ゴシック建築の様式は、周知のように、神のまします天上を志向するという宗教的思想がその背景にある。その思想を受け継いでいるかのように、初期チューダー朝様式も、地から天への垂直な線が、その建物の際立った特徴である。

それは、ローマとフローレンスのオズモンド [Gilbert Osmond] の住居のようには爛熟した美ではないかも知れないが、より健全な美しさということができるとはあるまいか。

ここで少し付言しておくべきは、もともとのゴシック様式が主として教会など公共の建物に使用されたのに対して、その一変形ともいえる初期チューダー朝様式は、富裕階級の邸宅などにも適用された、ということである。また、ゴシック様式の発祥はフランスなのだが、その歴史は、イギリスに於て、このチューダー様式を含めて、最も長く持続したのだ。イギリスは石材に乏しいので煉瓦に頼ったという点でも、石造りであったフランスのそれとは異なっていた。

ガーデンコートの屋敷もこれらの実情を踏まえてそこに存在していた、ということはいうまでもないことだろう。

ただ、ガーデンコートは、Bell も指摘しているとおり、⁹ 死を待つばかり

の二人の住人を抱えてあまりにも静まりかえっていた。そして、イザベルの登場こそが、この住居を新しく蘇らせたかのようである。

閉鎖性の最も濃厚なのは、何ととっても、フロレンスとローマのオズモンドの住居であろう。しかし、オールバニーの家も、一般に開放的と考えられがちなアメリカン・ハウスのひとつであるにもかかわらず、これは、開放的とはいえない。少なくとも、そこでのイザベルは、閉鎖的な身の置き方をしている。

タレット夫人が訪ねてきたとき、イザベルは、奥まったところにある陰気な部屋で、一冊の書物を膝にのせて椅子にすわっていた。本好きで夢想好きの乙女のイメージである。

彼女は、この家での生活でも、外界に通じている扉を開けようとはしなかった。限られた空間の中に自らを閉じ込めて、それによってますます活発になる想像力の世界をひたすら楽しむ、という傾向を示している。

It was in the "office" still that Isabel was sitting on that melancholy afternoon of early spring which I have just mentioned. At this time she might have had the whole house to choose from, and the room she had selected was the most depressed of its scenes. She had never opened the bolted door nor removed the green paper (renewed by other hands) from its side lights; she had never assured herself that the vulgar street lay beyond. A crude, cold rain fell heavily; the springtime was indeed an appeal — and it seemed a cynical, insincere appeal — to patience. Isabel, however, gave as little heed as possible to cosmic treacheries; she kept her eyes on her book and tried to fix her mind (30-31, [3]).

このときのタレット夫人とのやりとりをとおしても、彼女は、現実問題

の処理の才能には恵まれていないということを露呈している。即ち、タチェット夫人をこの家を下見に来た客の一人と取り違えたことはともかく、夫人から家の値段を尋かれても適切に答えることができない。家を売りに出している状況であるにもかかわらず、自分はそういうことには全く無関心で無知である。

“How much money do you expect for it [the house]?” Mrs. Tuchett asked of her companion, who had brought her to sit in the front parlour, which she had inspected without enthusiasm.

“I haven't the least idea,” said the girl.

“That's the second time you have said that to me,” her aunt rejoined. “And yet you don't look at all stupid.”

“I'm not stupid; but I don't know anything about money” (33-34, [3]).

オールバニーの家そのものは、二つの家をくっつけたデュプレックスということになっているが、出入り口が二つ付いており、窓も小さくはない。多くのアメリカン・ハウスのように、むしろ、開放的な造りになっている。しかし、イザベルは、外界に通じる扉を開けようとはしなかったのだ。そして、この閉ざされた扉は、イザベルが想像に集中することを可能にしてくれたが、Auchard が指摘しているように、¹⁰ ここでのイマジネーションはまだ未熟なものであり、彼女の意識が円熟したものとなり、機微に通じる鋭さを発揮するようになるのは、ローマのオズモンドの住居に於いてである。

フロレンスとローマのオズモンドの住居は、世間に対して門戸を閉ざす、という意志をはっきり示している。

そういう建物が、閉塞的でデカダントな生き方をするオズモンドを象徴するものとして、外側も内側も提示されている。

例えば、フロレンスの丘の上にあるオズモンドの「目蓋はあるが目はない」邸宅は、次のように描写されている。

The house had a front upon a little grassy, empty, rural piazza which occupied a part of the hill-top; and this front, pierced with a few windows in irregular relations and furnished with a stone bench lengthily adjusted to the base of the structure and useful as a lounging-place to one or two persons wearing more or less of that air of undervalued merit which in Italy, for some reason or other, always gracefully invests any one who confidently assumes a perfectly passive attitude — this antique, solid, weather-worn, yet imposing front had a somewhat incommunicative character. It was the mask, not the face of the house. It had heavy lids, but no eyes; the house in reality looked another way — looked off behind, into splendid openness and the range of the afternoon light (325, [3]).

更に、この建物の一階の窓のありようは、次のように、象徴的だ。

...on this bright morning of ripened spring its tenants had reason to prefer the shady side of the wall. The windows of the ground-floor, as you saw them from the piazza, were, in their noble proportions, extremely architectural; but their function seemed less to offer communication with the world than to defy the world to look in. They were massively crossbarred, and placed at such a height that curiosity, even on tiptoe, expired before it reached them (326, [3]).

これは、世間に対してすべてを閉ざしている。

尤も、今、オズモンドが、娘のパンジーと二人の尼僧と一緒に身を置いて

いる部屋は、裏庭に面した高い大きなドアがあるので、暗さはない。のみならず、計算のゆき届いた優雅さがある。

但し、外側の世界はシャットアウトされていて、内部は活気に乏しい。

In an apartment lighted by a row of three of these jealous apertures — one of the several distinct apartments into which the villa was divided and which were mainly occupied by foreigners of random race long resident in Florence — a gentleman was seated in company with a young girl and two good sisters from a religious house. The room was, however, less sombre than our indications may have represented, for it had a wide, high door, which now stood open into the tangled garden behind; and the tall iron lattices admitted on occasion more than enough of the Italian sunshine. It was moreover a seat of ease, indeed of luxury, telling of arrangements subtly studied and refinements frankly, proclaimed, ... (326, [3]).

ローマのオズモンド家では、オズモンド夫人となったイザベルが木曜ごとにパーティーを開いている。

その建物は、パンジーに恋するロウジヤーによって、次のように捉えられている。

The object of Mr. Rosier's well-regulated affection dwelt in a high house in the very heart of Rome; a dark and massive structure overlooking a sunny *piazzeta* in the neighbourhood of the Farnese Palace. In a palace, too, little Pansy lived — a palace by Roman measure, but a dungeon to poor Rosier's apprehensive mind. It seemed to him of evil omen that the young lady he wished to marry, and whose fastidious father he doubted of his ability to conciliate, should be immured in

a kind of domestic fortress, a pile which bore a stern old Roman name, which smelt of historic deeds, of crime and craft and violence, which was mentioned in "Murray" and visited by tourists who looked, on a vague survey, disappointed and depressed, and which had frescoes by Caravaggio in the *piano nobile* and a row of mutilated statues and dusty urns in the wide, nobly-arched loggia overhanging the damp court where a fountain gushed out of a mossy niche (100-101, [4]).

また、この住居には、いかに価値ある骨董品があふれているか、ということも明示されている。ロウジャーの目から見て、醜い部屋もあるということと共に。

They [Pansy and Rosier] went in together; Rosier really thought the room very ugly, and it seemed cold. The same idea appeared to have struck Pansy. "It's not for winter evenings; it's more for summer," she said. "It's papa's taste; he has so much" (110, [4]).

更に、オズモンドという人物の何たるかを示す、建物の比喩を用いた表現のきわめつきは、次のようなものであろう。

Between those four walls she [Isabel] had lived ever since; they were to surround her for the rest of her life. It was the house of darkness, the house of dumbness, the house of suffocation. Osmond's beautiful mind gave it neither light nor air; Osmond's beautiful mind indeed seemed to peep down from a small high window and mock at her (196, [4]).

オズモンドの住居の洗練された退廃美の傾向は、ガーデンコートのカント

リーハウスを頭に入れて眺めるとき、コントラストをなして一層際立つ。これに対するガーデンコートは、すでに言及したとおり、後期ゴシックの一変形とも言える様式であり、「物質的世界の壮麗さを通じて人間が神に至ることができる」とする宗教的な精神を背景としているのである。¹¹

ガーデンコートとフロレンス・ローマのオズモンドの住居の象徴性を考えるに際して、もうひとつ注目すべき事実は、それぞれの住居の主人がいずれもアメリカ人として生まれた人たちだということであろう。

ともにアメリカ生まれでありながら、ちょうど問題の住居の比較がそうであるように、それぞれの主人は互いに何と異なる人種になってしまっていることだろう。

タレット氏の容貌には、まだ、はっきりとアメリカ人らしい特徴が残っている。イギリスで銀行家として成功しているのだが、その生きる姿勢からいっても、アメリカ人としてのアイデンティティを失っていない。初めのうちは気にいらなかった、イギリスの歴史の古い屋敷、をも今ではすっかり気にいって自慢するまでになっているのだが、自分がアメリカ人であるという自覚と誇りを保持している。のみならず、彼は、死期を待つ病人でありながら、その風貌や言動には健全な精神を窺わせるものがある。

The old gentleman at the tea-table, who had come from America thirty years before, had brought with him, at the top of his baggage, his American physiognomy; and he had not only brought it with him, but he had kept it in the best order, so that, if necessary, he might have taken it back to his own country with perfect confidence. At present, obviously, nevertheless, he was not likely to displace himself; his journeys were over and he was taking the rest that precedes the great rest.... He was neatly dressed, in well-brushed black; but a shawl was folded upon his knees, and his feet were encased in thick, embroidered slippers (4-5, [3]).

これに対して、オズモンドはどうか。彼の場合は、アメリカ人としてのアイデンティティを完全に失っているといってもいい。そればかりか、それこそが、この男の望むところであったと考えられるふしがある。

He [Osmond] was a man of forty, with a high but well-shaped head, on which the hair, still dense, but prematurely grizzled, had been cropped close. He had a fine, narrow, extremely modelled and composed face, of which the only fault was just this effect of its running a trifle too much to points; an appearance to which the shape of the beard contributed not a little. This beard, cut in the manner of the portraits of the sixteenth century and surmounted by a fair moustache, of which the ends had a romantic upward flourish, gave its wearer a foreign, traditinary look and suggested that he was a gentleman who studied style (328, [3]).

更に、彼の無国籍性が、次のように表現されている。

You would have been much at a loss to determine his original clime and country; He had none of the superficial signs that usually render the answer to this question an insipidly easy one. If he had English blood in his veins it had probably received some French or Italian commixture; but he suggested, fine gold coin as he was, no stamp nor emblem of the common mintage that provides for general circulation; he was the elegant complicated medal struck off for a special occasion. He had a light, lean, rather languid-looking figure, and was apparently neither tall nor short (328-329, [3]).

彼は、タチェット氏とは正反対で、「はたらく」ということを拒否する意

け者であり、気難しいエゴイストである。

また、彼が、人種的にもタチェット氏と違って、イギリス人の血のほかにも、フランス人かイタリア人、つまり、ラテン系の血も混じっているらしいという事は、それなりの意味を有しているだろう。

しかし、マダム・マールがイザベルに語ったところによると、彼はヨーロッパきっての才人の一人だそうである。

She [Mme Merle] had mentioned to Isabel most of the people the girl would find it well to "meet" — of course, she said, Isabel could know whomever in the wide world she would — and had placed Mr. Osmond near the top of the list. He was an old friend of her own; she had known him these dozen years; he was one of the cleverest and most agreeable men — well in Europe simply. He was altogether above the respectable average; quite another affair. He wasn't a professional charmer — far from it, and the effect he produced depended a good deal on the state of his nerves and his spirits (351, [3]).

但し、これは、かつて彼女が、有夫の身でありながら恋におちて、間に子供までもうけた相手のことを語っているうえに、その男についてイザベルが好意的な先入観を抱くように策略的にしむけているところなのだから、これがどの程度真実にふれているかは、定かではない。とはいっても、彼が、頭もわるいほうではなくて、洗練された繊細な感性と知性をもった審美家であるということは事実であろう。この審美家は、美の女神に仕え赤貧に甘んじるといふ反俗的なポーズを世間に対してとってはいるが、それは仮面であって、その正体は世俗的な利欲が非常に強い俗物だということが、後に暴露される。彼の生き方が、なにかにつけて、ひどく打算的で作為的だということも。彼は、審美の道では卓越した知識と感性を持っているが、反面、新鮮な現実というものには、すっかり背を向けてしまっている。

彼は、現実というものを住居の外へシャットアウトしてしまい、閉じられた空間の内側で、骨董美術品の収集や鑑賞に耽ったり、ディレクターとして絵を描いたりしながら、日々を過ごしている。その思想には、どこか『アクセルの城』¹²のそれに通じるところがなきにしもあらずだ。

いずれにせよ、彼はもはやアメリカ人ではない。かといって、ヨーロッパ人といえるかといえはそれもずいぶんと怪しい。得体のわかりにくい疑似ヨーロッパ人、無国籍の根無し草、贗物、である。そして、フロレンスとローマの彼の住居は、彼の生き方と内面を象徴的によく表現し得ている。(厳密には、フロレンスの住居とローマのそれとのあいだにも微妙な相違点があるのだが、このことについては本稿以外の別の機会にゆずることにする)

この作品には、ガーデンコートのカントリーハウス対フロレンス・ローマのオズモンドの住居との軋轢の物語であるという側面もある。

洗練された瀟洒な後者が、デカダンス、見せかけ、偽り、といったものの根城であるのに対して、地味な美しさをもつ前者は、地道な堅実さ、瞑想的観照、冷静な観察と批評、といったものの根城である。

自分の最期が近いのを自覚したラルフがローマに滞在してイザベルと会い続けるとき、上記二者の対立と軋轢も、殆どクライマックスに達する。

勿論、ガーデンコートそのものがローマに移動するわけではないのだが、ここでは、ラルフが、ガーデンコートを代表する象徴的存在として、オズモンドの住居が代表するものを脅かすのである。オズモンドが如何にそのことを嫌がって不快に思っているかということを示す場面が繰り返される。

後に、ガーデンコートに帰っていったラルフが危篤に近い状態になって、イザベルに会いたがったときも、オズモンドは、妻がそれに応じることを禁じる。にも拘らず、イザベルは、夫の脅しさえ無視して、ラルフに会うためにガーデンコートへやってくる。しかし、それは、単に従兄に会うためだけだったのだろうか。

ラルフが、死を迎える場所として選んだのは、他のどこでもなく、やはり、

タレット氏もそこで生を終えた、ガーデンコートであった。

ガーデンコートは、彼らが静かに死を迎えるのに相応しい環境である。

此処には、オズモンドの住居のように高価な美術骨董品が集められているわけでも、飾られているわけでもない。画廊はあるが、そこにかかっているのは、とくに好事家の関心を呼ぶようなものではない。

ローマから駆けつけてきたイザベルは、このとき、ガーデンコートに何を求めていたのであろうか。ラルフの要望に応じて来たのだから、一見、この世を去ろうとしている従兄のために来たようにみえる。確かに、そのとおりのこともある。しかし、動機はそれだけだったのだろうか。場面の中で、彼女が自分自身のために来たのもある、ということが明らかにされているのではないか。ここで初めて、彼女は、胸の奥に必死で隠し続けてきた秘密をラルフに打ち明けるのだ。

彼女の動機は、ラルフがタレット氏に頼んで大金を彼女に遺贈させたということを確認するためだった、とする研究者もいるが、¹³ そこにつながる事実を踏まえて考えれば、それは説得力に欠けるだろう。それは、あくまで、後から追加した目的であって、ガーデンコートへ帰ろうと決意した直接の動機ではなかった。なぜなら、この話をマダム・マールから彼女が聞かされたのは、すでにガーデンコート行きを決心した後だったからである。つまり、事實は、彼女がローマを出発するに際して修道院へパンジーに会いに行った時に、そこに来ていたマダム・マールからそのことを初めて聞かされたのだ。

夫の反対や脅しをも振りきってガーデンコートへ旅立った彼女の内面には、何よりも、それまでは、自分の誇りと体面を守るために騙し続けてきたラルフに、彼がこの世を去る前に、真実を打ち明けて彼と和解したい、という願望が強かったのである。(もちろん、それまででも、ラルフは、イザベルの結婚生活がひどく不幸なものである、ということは見抜いてしまっていた。しかし、その事実を否定し続けてきた当人のイザベルが、言葉に出してそれを認めるのとそうでないのとでは、大きな違いがあるだろう) それは、やはり、それをしなければ彼女自身の心が安らがないという、意識の深層からの

願望である。

それに、ガーデンコートそのものが、今のイザベルにとって、ひとときの安らぎを与えてくれる唯一の場所なのだ。それは、疲れた小鳥にとっての大樹のようなもので、イザベルはそこへ疲れた翼を休めに帰ってきた。まるで、鉄が磁石に引き寄せられるときのように、イザベルはガーデンコートへ帰ってきた。

また、彼女の性格からいって、この際、オズモンドの脅しに屈するのは不自然である。同時に、ラルフと心から和解したい、心の底を打ち明けたいという願望は心理学的にも十分うなずける。

その場所として、ガーデンコートが最もふさわしい。

また、同時に、傷つき疲れた彼女の、安らぎを求める意識が、その健全でおだやかな美しさやタレット氏の父親のようなやさしさが記憶に深く刻まれているガーデンコートに惹きつけられても、不思議はないだろう。

これまでも明示してきたガーデンコートのイメージや特質からいって、このガーデンコートを起点としてのイザベルの「行きて帰る」という深層心理に導かれた軌跡は、納得のいく展開である。

ガーデンコートには、すでに指摘してきた諸特徴が暗示しているように、ローマの住居とは根本的に異なる質の雰囲気がある。それを支えているものは、ひとつには、ローマのラテン文化に対するアングロサクソンの文化である。かつて Clemont Searle が、¹⁴ 自分の祖先と縁者を求めてイギリスへ病弱の身をおしてやってきたときのような気持ちは、先祖がイギリス人であったイギリス系アメリカ人の心のどこかに潜んでいるというのが自然であろう。そして、イギリス系アメリカ人のイザベルにとっては、イギリスは、もうひとつの故郷のようなところもあって、それだけでも、気持ちをなごませてくれるのである。

イギリスのこのような作用を更に大きく助長しているのが、ガーデンコートの屋敷の在り様にほかならない。

くり返しになるが、この屋敷が初期チューダー朝様式の建物で、エリザベ

ス女王も宿泊されたことのある由緒正しいものであること。クロムウエルのカトリック排撃の暴力によって破壊されて修復され、18世紀になってからも都合によって改修が加えられた、という風に長い歴史の過程を経てきたものだということ。これらの刻み込まれたことのすべてが、有形無形に総合的に働き合ってガーデンコート of 屋敷の内包的意味を、それが人に与える印象を、作り出しているのである。

そのうえ、建物の経てきた歴史が、或る程度、説明として与えられているだけでなく、物語の展開の過程をとおしても、この建物の内容がどのようなものであるかが、折りにふれて具体的に示されている。それを経験することをとおして、読者の頭の中に、おのずから、この建物の内包的意味が形成されていく、という仕掛けだ。

このチューダー朝様式の建物の背後には、既に引用もしたとおり、天にまします神に近付こうとする宗教的思想があるわけだが、この建物には、まるで大樹のように、人々に安らぎと憩いの場を提供するやさしさがある。一見、城のように閉鎖的にみえながら、実際は、これまで示してきた具体例からも判るとおり、もとめて来る者に対して案外に開かれていて、風通しが良い。ガーデンコートの三人家族のうちの二人までが深刻な病気を抱えているのに、その住居も、彼らのそこでの暮らしぶりも、病的なところはなくて、むしろ、精神は健全である。

なるほど、ラルフは働こうとしないのだが、その動機は、オズモンドとは大いに異なる。彼は、ビジネスの世界で活動したくても肉体の病気が原因でできないからであり、それは文字通り、やむを得ない選択である。のみならず、彼は、懶惰の中に沈淪してしまうのではなくて、観察者として生きようとしている。すなわち、彼にとっては、「観る」ということが「行動」であり、「生きる」ことである。(これは、作者の生き方とも通じ合うところがある)

そして、生き方にやましさを持つオズモンドとマダム・マールが恐れて嫌がったのも、彼のこの「観察」であったのだ。

さて、ガーデンコート小屋の一室で、ローマから駆けつけたイザベルとラルフとの間で、いよいよ、物語のクライマックスともいえる場面が現出する。

夜がようやく明けようとする頃、イザベルは、彼女の寝室で、生まれて初めて幽霊を見る。同時に、彼女は、ラルフの死を直感する。

(Fowler は、イザベルがラルフの幽霊を見たことをもって、彼女はラルフの 'vision of the world' を受け入れたことになる、と解釈する)¹⁵

彼女が駆けつけると、ラルフが息をひきとったところだった。遺体の頭の側のベッド脇に、寝ずの看病をしたタレット夫人がうずくまっていた。足の方の側には、二人の看護婦が立っていた。

これがラルフの臨終の情景であり、絵画の名作「ピエタ」との類縁が指摘されもする。¹⁶

この極めて厳粛な情景には、ガーデンコート小屋が、作品中の住居の中で、最もふさわしい。それは、フロレンスでもローマでもオールバニーでもさまにならないだろう。

こうして、物語の開幕も終幕もそのステージはガーデンコートだったわけだが、開幕時には未熟そのものだったヒロインは、数年後の今、人生経験を経て、洗練と円熟の味わいをにじませるまでに成長している。遂に、ここで、彼女が幽霊を見ることができたということも象徴的である。オズモンドの反対や脅しに屈しないで危篤状態のラルフの病床へ駆けつけたこと、ウォーバトン卿の心の深層を見抜いて彼をパンジーから賢明な方法で遠ざけたこと、マダム・マールをも遠ざけることに成功したこと、など。もはや、彼女は、以前に指摘されたような現実処理能力に欠ける、マナーも知らない、未熟な夢追い人間ではなくなっているのである。

成長して変貌したイザベルの新しい肖像は、彼女がガーデンコートに身を置くとき、開幕時のそれと際立ったコントラストをなして鮮やかに浮かぶのである。

それにしても、ローマのオズモンドの家は彼女にとっては将に針の筵か針

の山のような存在であり、イザベルは、今だに、この世に安住の場所を得てはいず、なおも、少なくとも精神的には、「家なき女」である。

Collecott は、ローマのオズモンドの家が ‘the house of suffocation’ であることを指摘し、¹⁷ Woolf は、イザベルがそこへ帰っていくのは、‘under-world’ へ帰っていくことである、と解釈している。¹⁸

これまで辿ってきたとおり、彼女の心が一番落ち着けるのは、やはり、このガーデンコートである。だからといって、これは彼女の家ではなく、イザベルは、この屋敷に住み続けることはむつかしいのだが、それでもなお、内面的には、ガーデンコートは、彼女の心の拠りどころとしての役割を果たしているのである。

チャンドラーは、ガーデンコートをも、オールバニーの家やオズモンドのローマやフロレンスの住所と一緒に束ねて、イザベルに対して閉ざされた否定的なものとして解釈しているが、¹⁹ これは、私には、首肯しがたい。

この論稿の中で行ってきた、他の建物とガーデンコートの比較の結果に照らせば、前者と違って後者が、イザベルの側に寄り添って、いかに好意的に描かれているかが、自ら、明らかである。そして、イザベルのそれに対する行動や反応を見れば、いかに彼女がガーデンコートにアフィニティと安らぎを感じていたか、ということが歴然としている。

イザベルは、ガーデンコートを人生のアドベンチャーの起点として、「行きて帰る」軌跡を描いており、そこに、彼女の意識の深層の傾斜を窺わせている。

彼女が、最終的に、自己の選択の結果と運命を改めて受け入れる決意をすることになるのも、このガーデンコートに於てであり、この場所以上にそれに適した場所は他に考えられない。

さいごに、マダム・マールさえもが、このガーデンコートをいかに愛していたか、ということをも付け加えておきたい。彼女は、オズモンドにもパンジーにも冷たく突き放されて、イザベルの前に敗残の身をさらして別離を告げた時、ガーデンコートへの思いを次のように告白している。

She [Mme Merle] paused a moment, then added: "And you'll see dear old Gardencourt again!"

"I shall not enjoy much," Isabel answered.

"Naturally — in your grief. But it's on the whole, of all the houses I know, and I know many, the one I should have liked best to live in. I don't venture to send a message to the people," Madame Merle added; "but I should like to give my love to the place" (380, [4]).

注)

1. Marilyn R. Chandler, *Dwelling in the Text* (Berkeley: University of California Press, 1991), 96.
2. *ibid.*, 95.
3. Paul B. Armstrong, *The Phenomenology of Henry James* (Chapel Hill and London: The University of North Carolina Press, 1983), 111.
4. Robert L. Gale, *A Henry James Encyclopedia* (New York: Greenwood Press, 1989), 520.
5. Robert E. Long, *The Great Succession* (Pittsburgh: The University of Pittsburgh Press, 1979), 106.
6. Henry James, *The Novels and Tales of Henry James, New York Edition* (Copyright 1908 Charles Scribner's Sons; Re-issued 1976 by Augustus M. Kelley Publishers, Fairfield, New Jersey 07006), Vol.3, p.2.
これ以降, text からの引用は全てこの版からのもので, 引用文の後の () 内にページ数を, [] 内にその巻数を, 示す。
7. Chandler, *op. cit.*, 97.
8. 世界美術全集 (東京: 平凡社, 1930), 14巻19頁
Yoshio Koine, Editor in Chief, *Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary* (Tokyo: Kenkyusha, 1980), 2272. (Tudor architecture の項)
Harold Osborne. ed., *The Oxford Companion To Art* (New York: Oxford University Press, 1970), 492.
9. Millicent Bell, *Meaning In Henry James* (Cambridge, Massachusetts: Har-

- vard University Press, 1991), 103.
10. John Auchard, *Silence In Henry James* (Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 1986), 74.
 11. 相賀徹夫編集著作出版, 世界美術大辞典 (東京: 小学館, 1989), 第2巻, 302頁
 12. Edmund Wilson, *Axel's Castle* (New York: Charles Scribner's Sons, 1931)
 13. Alwyn Berland, *Culture and Conduct in the Novels of Henry James* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981), 92.
 14. Henry James, "A Passionate Pilgrim" (1975) の主人公
 15. Virginia C. Fowler, *Henry James's American Girl* (Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1984), 80.
 16. Judith Woolf, *Henry James* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991), 55-56.
 17. Diana Collecott, "Framing *The Portrait of a Lady*: Henry James and Isabel Archer," *The Magic Circle of Henry James*, ed. Ayyapa Paniker (New York: Envoy Press, 1989), 48.
 18. Woolf, op. cit., 56.
 19. Chandler, op. cit., 93.

Gardencourt and Isabel Archer, Heroine of *The Portrait of a Lady*

—A Study of Henry James—

Hiroaki Dehara

The purpose of this paper is to make clear the relation and meaning of the countryhouse at Gardencourt to Isabel Archer.

Into the story come a number of houses, but only four of them actually concern the heroine; they are the countryhouse at Gardencourt, Isabel's grandmother's house in Albany, and Osmond's lodging places in Florence and Rome respectively.

Osmond's houses are much more refined and decorated than the other two. However, they are closed to the world. For instance, his villa in Florence is described as 'having heavy lids but no eyes', and his Palazzo Roccanera in Rome, as 'the house of suffocation.'

The American house in Albany is not open to the world, either. The way Isabel lives there is to enclose herself to the corner of a room and devote herself to reading books and reverie, without opening its door which would give access to the outside.

Mr. Touchett's estate at Gardencourt is not very closed to the world though it makes much of privacy.

It shows no decadence but religious aspiration after Heaven, one of the characteristics of Gothic architecture.

It was built under Edward the 6th, of early Tudor style, honoured by the great Elizabeth's overnight stay, bruised in Cromwell's wars, and remodelled in the 18th century.

The house may tell a lot about its master. Mr. Touchett is mentally healthy though he is fatally ill. He preserves his identity as an American well, both in his appearances and frame of mind. His estate, with its aestheticism, its honourable history, its religious symbolism of early Tudor style, and without any decoration of vanity, suggests the master's way of life, and that of Ralph, his son, who, cynical, is also mentally healthy in spite of his crucial illness.

Mr. Osmond has completely lost his identity as an American and he belongs nowhere. Neither his looks nor his spirit holds any nationality. He is rootless.

Osmond's villa in Florence and his Palazzo Roccanera in Rome represent what their master is; he, who is an egotistic aesthete, sensitive and clever, turns his back on the real world and collects curios; he is a snob to a T, full of pretension and vanity.

Osmond, who is nearly 20 years older than Isabel, entraps her into marrying him and encloses her in his Palazzo Roccanera as if she were one of his collected curios.

When Ralph's illness becomes critical, Isabel returns to Gardencourt to see him, in the teeth of her husband's threats.

One of her motives for this is to be reconciled with him, that is, to confess to him that her married life is miserable and that she was wrong in marrying Osmond against Ralph's objection.

Another motive to drive her into returning there is her nostalgia for Gardencourt. Psychologically speaking, Gardencourt could be a real home for her. Only this place makes her feel herself most relaxed, and enlivened. This is the place from which she jumps into the abysses of life, and comes back again, exhausted with its hardships. Now she is a grown-up woman, mentally well developed, quite different

from that romantic girl who had very little knowledge of real life when she showed herself to us for the first time at Gardencourt several years ago.

She likes Gardencourt best of all the houses in the story, feeling a greatest affinity for it. However, Gardencourt is not hers legally, and so it is very difficult for such a self-reliant woman as she to indulge herself with Ralph's kindness and live there for ever. As it is, she has to return to Rome, partly to defend herself against Casper Goodwood, her persevering wooer. Yet, Gardencourt remains in her mind an affinity most comfortable and most soothing.

Even Mme Merle, who is Osmond's mistress-conspirator, confesses to Isabel that dear old Gardencourt is the house in which she would have liked best to live.